研究論文

いじめ場面における傍観者の共感性といじめ関連行動との関係

王　影[1)]，桜木　惣吉[2)]

【要旨】本研究では、いじめ場面における傍観者の行動に着目し、大学生がいじめについてどのような考えを持っているのかを明らかにするとともに、共感性の要素によって、傍観者自身のいじめ関連行動がどのように影響されるのかを、場面想定法を用いて検討した。その結果、共感性の感情的側面の要素である「ネガティブな感情への同情」が、無視・暴力両場面における傍観者の援助行動の促進に有意に寄与していることが示唆された。また、暴力場面における仲裁行動には、男性では「視点取得」が大きく寄与している可能性が示された。今後、傍観者がいじめを抑制するようにするためには、共感性の中でも特に「ネガティブな感情への同情」や「視点取得」の向上に努めることが重要だと考えられる。

キーワード：傍観者、共感性、いじめ場面、いじめ関連行動、大学生

Ⅰ．緒言

かつてのいじめ研究では、加害者のいじめ行動の促進要因や抑制要因に関する検討が、精力的に行われていた[1)]。子どもは成長につれて、自我の目覚め、性的成熟など、思春期を特徴づける変化が顕著となり、学級内の小団体だけでなく、クラブ活動・部活動などを通して、学級・学年を越えて人間関係が広がっていくと同時に、友人間の結束が深まる一方で、友人間の葛藤も生じやすくなってくる。しかし、現代の子供たちは、幼児期の人間的な関わりが希薄で実体験が不足していたり、家庭内での過保護や甘やかしにより欲求不満耐性が低下したりしており、このような要因が、学校現場の閉鎖性や管理の強化とも相まって、集団でのいじめ、閉ざされた空間でのいじめ、いじめの正当化、いじめの深刻化、傍観者の増加など、現代のいじめの特徴を形作っていると考えられている[1) 2)]。従って、加害者や被害者だけに焦点を当てた研究では、いじめ問題の解決には不十分である。森田・清永は、いじめの構造は、被害者、加害者、観衆、傍観者という4層構造になっていると主張しており[3) 4)]、またいじめが減少しない理由の一つとして傍観者の存在をあげている[5)]。この“いじめの四層構造”論が展開されて以来、「傍観者」に焦点を当てた研究調査も広く行われるようになり、多くの注目を得るようになった。森田は、いじめを国際比較した場合、英国やオランダでは、中学2年生くらいの自我が確立しはじめる時期になるといじめの傍観者が減って、仲裁者が増えていく傾向があるが、日本では、この傾向は見られず、学年が上がるにつれて、傍観者が増える一方であると報告している[6)]。

傍観者とは、いじめが行われているのを、見て見ぬふりをしている者、あるいは、やめてほしいと思っていても、何をすることもできず、無力感を抱えている者と考えられている[3)]。いじめ場面における傍観者は、いじめの加害者や被害者への働きかけを通して、いじめの停止や被害者の心理的苦痛の低減に重要な役割を果たすことが示唆されている[7)]。例えば、傍観者がいじめに対して冷ややかな反応を示せば、いじめを抑制する存在になり、いじめの仲裁者は「傍観者」から分化する形で現れるということである[4)]。このように傍観者の行動によって、加害者のいじめ行動が変容しうることが指摘されている[4) 8)]。従って、いじめを大問題に発展させないための取り組みにおいて、鍵になるのは、傍観者集団の態度や行動である。傍観者は周囲の様子を見て態度を決めると言われており、援助行動についても相手にとって援助が必要かどうかを認識することから行動を決めている[9)]。また、傍観者のいじめ場面における行動を規定するもう1つの要因として、共感があげられる。共感とは、“感情体験をしている他者に

2016年12月10日受理
[1)] 愛知教育大学大学院生（養護教諭専攻課程）
[2)] 愛知教育大学養護教育講座

対して、相手と同様の感情が生じたり、相手の状況にふさわしい感情が生じたりすること”である[10]。桜井・葉山ら（2011）は、共感性と向社会行動、攻撃行動との関連を調べ、他者のポジティブ、ネガティブ両方の感情に共感できる群は、最も向社会行動をとりやすく、ポジティブな感情に共感しにくい群は、攻撃行動をとりやすいことを明らかにした[11]。つまり、共感性は利他的行動を促進することが実証されており、攻撃行動を抑制することも期待できる。このことをいじめ場面に適用すると、共感は被害者への援助を促し、加害行動への加担を抑制する機能を持ちうると考えられる。しかし、共感のどの要素がどんないじめ関連行動に関与するかについては十分明らかにはなっていない。

Ⅱ．目的

本研究では、いじめ場面における傍観者の行動に着目し、これから社会人となる大学生がいじめについてどのような態度を持っているのか、また共感性やいじめ関連行動は将来いじめ問題と向き合うことになる教育系課程とその他の課程では異なるのか、男女差はあるのか、を明らかにするとともに、共感性の要素によって、傍観者自身のいじめ関連行動がどのように影響されるのかを検討することを目的として、教育を担う教育系課程と教育を担わない非教育系課程で場面想定法を用いた質問紙調査を行った。また、質問紙調査の信頼性向上の一助とするため、社会的望ましさの程度についても併せて調査した。

Ⅲ．方法

1）調査対象

平成28年4月～5月、愛知県内のA大学に通う教育系課程と非教育系課程（国際文化コース）1~3年生239名を対象に、無記名の質問紙調査を実施した。表1に調査対象者の内訳を示した。質問への回答に不備があるものを除いた有効回答者は236人（男性79人、女性157人）で、有効回答率は98.7%であった。

表１．調査対象者の内訳

学部	男	女	合計
教育系	26 人	73 人	99 人
非教育系（国際文化コース）	56 人	84 人	140 人
合計	82 人	157 人	239 人

2）調査内容

①社会的望ましさ（Social Desirability：SD）尺度

Crowneらの原著[12]から翻訳された「日本語版Social Desirability Scale」（SDS）[13]を使用して社会的望ましさの程度について調査した。この日本語版SDSは、33項目の設問について「はい」もしくは「いいえ」で答えるよう編集されており、「はい」という答えが社会的望ましさ（SD）を示すものと、「いいえ」という答えがSDを示すものがあるので、前者には「はい」に1点を、後者には「いいえ」に1点を与え、その合計をSDSの総合点とした。北村・鈴木（1986）は10項目版のSDSについてではあるが、その平均得点より2標準偏差分を超える得点を示す者はSocial Desirabilityが非常に高度で、質問紙法の調査においても社会的に望ましく思われるように回答する傾向が強いため、その回答の解析においては慎重な対処が必要であると述べている。本研究で使用したSDSは全項目版ではあるが、同様にその平均得点より2標準偏差分を超える得点（26点以上）を示した者はSocial Desirabilityが非常に高度であると考え、今回の調査対象から除外した。また、全項目版のSDSの平均得点と標準偏差についてはCrowneらの値（13.7±5.8）を採用した。

②共感性

共感性については、葉山ら（2008）の作成した全30項目からなる共感性プロセス尺度[14]を使用して調査した。この尺度は「他者感情への敏感性」「視点取得」「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情の共有」「ネガティブな感情の同情」「ポジティブな感情への好感」の6つの下位尺度から構成されている。回答方法は、各項目につき「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「どちらとも言えない」「少しあてはまる」「あてはまる」で答える5件法で、それぞれの得点を1～5点として、各下位尺度の得点を求めた。

③いじめ提示場面

いじめ場面は場面想定法を用いて「無視場面」と「暴力場面」の二つを提示し、その時どのように行動するかについて回答を求めた。「無視場面」については、蔵永・片山ら（2008）が作成した無視場面シナリオ[15]を、「暴力場面」については、水野（2012）が、蔵永・片山ら（2008）が作成した「無視場面」を踏まえて、無視的ないじめに関連する語句や表現を、文章構成をほぼ同一としながら、暴力的ないじめに関連する語句や表現に変えて作成した暴力場面シナリオ[16]を提示した。対象者にとっては、両方とも傍観者の役割および共感を喚起できるシナリオであると考えられた。またシナリオの登場人物については、調査対象者

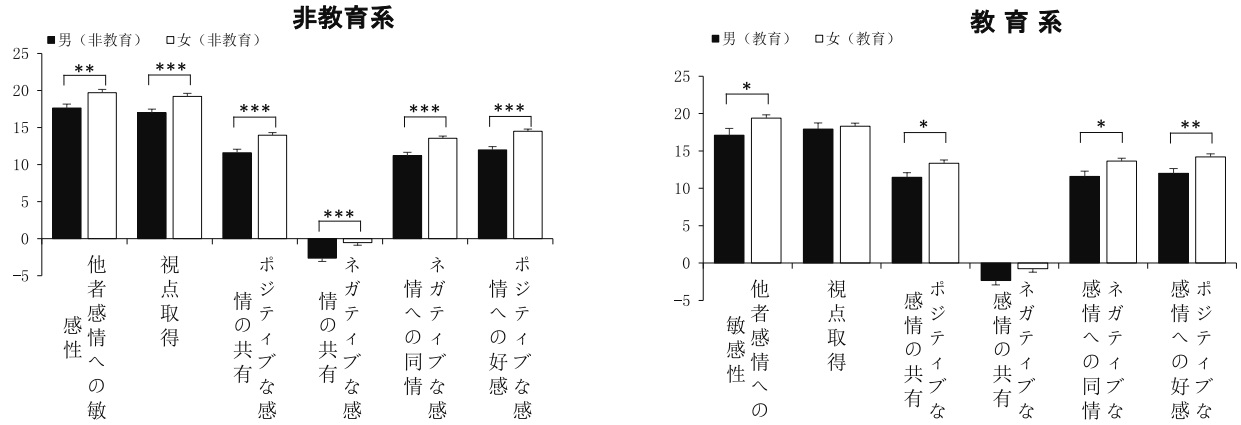

図1. 共感性の下位尺度の男女比較（平均±標準誤差）
*t*検定での男女の有意差が見られたものを*で示す（*$p<0.05$,**$p<0.01$, ***$p<0.001$ ）.
非教育学部では, 6つの下位尺度とも有意な男女差, 教育学部では,「他者感情への敏感性」「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情の同情」「ポジティブな感情への好感」の4つの下位尺度に有意な男女差が見られた.

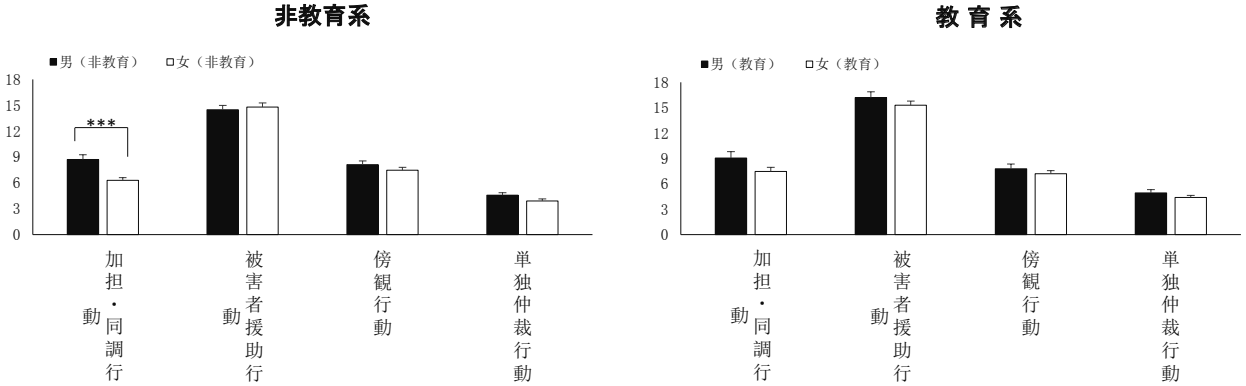

図2. 暴力場面におけるいじめ関連行動の各因子の男女比較（平均+標準誤差）
*t*検定での男女の有意差が見られたものを*で示す（*$p<0.05$,**$p<0.01$, ***$p<0.001$ ）.
非教育学部では,「加担・同調行動」に有意な男女差が見られたが, 教育学部では,
有意な男女差が見られる因子はなかった.

と同性であると想定するよう求めた。

④いじめ関連行動

「無視場面」におけるいじめ関連行動については、蔵永･片山ら（2008）が作成した「無視場面」に付随する16の質問項目[15] を使用して調査した。「暴力場面」におけるいじめ関連行動については、無視に関する語句や表現を暴力的な語句や表現に変更した質問項目[16] を使用して調査した。自身が呈示された場面におかれたとしたらそれぞれの行動をその後とるかどうかについて、「違う」「どちらかと言えば違う」「どちらかと言えばその通り」「ほぼその通り」「その通り」の5件法で回答させ、それぞれの得点を1 ～ 5点として、各行動の得点を求めた。また、5点（その通り）をその行動を取ると判断した。

水野（2012）は因子分析により、「暴力場面」に付随するいじめ関連行動については、第一因子「加担・同調行動」、第二因子「被害者援助行動」、第三因子「傍観行動」、第四因子「単独仲裁行動」という4因子を抽出し、「無視場面」に付随するいじめ関連行動については、第一因子「加担、同調行動」、第二因子「被害者援助行動」、第三因子「傍観行動」という3因子を抽出し解析を行ったので、本研究もこれらの因子を採用し分析した。また、暴力場面については、本研究では実際に仲裁行動をとることが暴力場面におけるいじめの解決に最も有効であると考えたので、「誰かと仲裁する」「Bたちに誰かとやめるように言う」「1人で仲裁する」「Bたちに1人でやめるように言う」という4つの項目を構成要素とする因子「仲裁行動」を作成し、暴力場面における仲裁行動についても検討した。

3）分析方法

共感性の各要素（下位尺度）が性別により異なるかを、所属ごとに*t*検定により検定した。共感性の下位尺度と各いじめ関連行動との関連についてはSpearmanの順位相関係数を算出して解析した。また共感性の各下位尺度を独立変数、いじめ

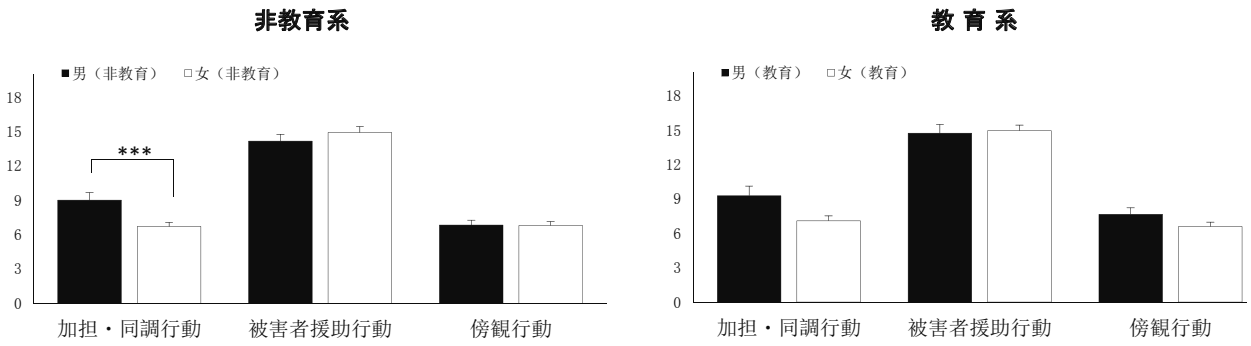

図3. 無視場面におけるいじめ関連行動の各因子の男女比較（平均+標準誤差）
*t*検定での男女の有意差が見られたものを*で示す（*p<0.05 ,**p<0.01, ***p<0.001 ）.　非教育学部では，「加担・同調行動」に有意な男女差が見られたが，教育学部では，有意な男女差が見られる因子はなかった.

表2. 共感性といじめ関連行動の各因子との関連

	他者感情への敏感性	視点取得	ポジティブな感情の共有	ネガティブな感情の共有	ネガティブな感情への同情	ポジティブな感情への好感
暴加担・同調行動	-.352**	-.285**	-.256**	-.173**	-.394**	-.407**
暴被害者援助行動	.185**	.268**	.225**	.164*	.210**	.173**
暴傍観行動	-.197**	-.255**	-.188**	-.209**	-.245**	-.183**
暴単独仲裁行動	-.129*	-.070	-.022	-.027	-.117	-.095
加担・同調行動	-.256**	-.211**	-.145*	-.133*	-.352**	-.300**
被害者援助行動	.180**	.255**	.242**	.141*	.245**	.165*
傍観行動	-.187**	-.215**	-.166*	-.189**	-.207**	-.178**

**: p<0.01, *: p<0.5

暴力場面：暴加担・同調行動、暴被害者援助行動、暴傍観行動および暴単独仲裁行動，無視場面：加担・同調行動、被害者援助行動および傍観行動と表示.

表3.「被害者援助行動」と共感性との関連

	共感性の下位尺度	B (S.E.)	Wald	OR	95%CI		P 値
暴力場面	ネガティブな感情への同情	0.213(0.079)	7.186	1.237	1.059	1.445	0.007
無視場面	ポジティブな感情の共有	0.286(0.113)	6.432	1.331	1.067	1.661	0.011
	ネガティブな感情への同情	0.281(0.092)	9.28	1.324	1.105	1.587	0.002

B：回帰係数；　S.E.：standard error；　CI：confidence interval；　OR：odds ratio.
オッズ比（OR）が，1よりも大きいほど，被害者援助行動への共感性の影響力が強くなる.

関連行動の各因子を従属変数として、共感性のどの要素がそれぞれのいじめ関連行動に関与しているかを、二項ロジスティック回帰分析により分析した。変数選択はステップワイズ変数増加法（Wald）により行い、確率：0.05で投入、0.10で除去とした。また、p<0.05を有意と考えた。統計処理は、統計パッケージソフトSPSS ver. 22.0 を用いて行った。

Ⅳ. 結果

SD 性が過度に高い者（SDSの得点が26点（平均＋2SD）以上）は非教育系課程の女性3人であった。これらの者は、自らが信じているものにしたがうのではなく、社会的に最も受け入れられやすいものにしたがって回答する傾向にあると考えられたので、調査の対象者から除外して分析した。また、所属課程ごとに男女比較を行い、共感性と各場面におけるいじめ関連行動の特徴を概観したうえで、共感性の下位尺度といじめ関連行動との関わりを検討した。

1）共感性

共感性の各要素に関して、非教育系課程と教育系課程に分け男女差について*t*検定を行い検討したところ、共感性の平均値については、非教育系課程では、男性は66.81（±14.61）、女性は80.42（±13.51）であり、教育系課程では、男性は67.73（±

表4.「被害者援助行動」と共感性との関連（男）

	共感性の下位尺度	B (S.E.)	Wald	OR	95%CI		P 値
暴力場面	ネガティブな感情の共有	□0.358(0.171)	4.396	0.699	0.501	0.977	0.036

B：回帰係数；　S.E.：standard error；　CI：confidence interval；　OR：odds ratio.
オッズ比（OR）が，1よりも小さいほど，被害者援助行動への共感性の負の影響力が強くなる.

表5.「被害者援助行動」と共感性との関連（女）

	共感性の下位尺度	B (S.E.)	Wald	OR	95%CI		P 値
暴力場面	ネガティブな感情への同情	0.251(0.102)	6.085	1.286	1.053	1.57	0.014
無視場面	ネガティブな感情への同情	0.285(0.107)	7.113	1.329	1.078	1.639	0.008

B：回帰係数；　S.E.：standard error；　CI：confidence interval；　OR：odds ratio.
オッズ比（OR）が，1よりも大きいほど，被害者援助行動への共感性の影響力が強くなる.

表6.　暴力場面の「仲裁行動」と共感性との関連

	共感性の下位尺度	B (S.E.)	Wald	OR	95%CI		P 値
男性	視点取得	0.657(0.292)	5.058	1.929	1.088	3.418	0.025
女性	ネガティブな感情の共有	0.200(0.106)	3.573	1.221	0.993	1.502	0.059

B：回帰係数；　S.E.：standard error；　CI：confidence interval；　OR：odds ratio.
オッズ比（OR）が，1よりも大きいほど，仲裁行動への共感性の影響力が強くなる.

16.76)、女性は78.12（±16.22）で、何れも女性の方が有意に高かった。

また、各下位尺度の平均値、標準誤差を算出し、男女差について分析を行ったところ、図1に示すように非教育系課程では、6つの下位尺度とも女性の方が有意に高かった。教育系課程では、「他者感情への敏感性」「ポジティブな感情の共有」「ネガティブな感情への同情」「ポジティブな感情への好感」の4つの下位尺度では女性の方が有意に高かったが、「視点取得」と「ネガティブな感情の共有」では有意差は見られなかった。

2）いじめ関連行動

暴力場面についてみると図2に示すように、非教育系課程では、「加担・同調行動」については、女性に比べ男性の方が有意に高かったが、教育系課程では、どの行動についても有意な男女差は見られなかった。また、非教育系課程より教育系課程の男性の方が、有意水準には達しなかったものの「被害者援助行動」の得点が僅かに高かった（平均＋標準偏差：16.192+3.567 vs 14.472+3.656, p=0.0512）。無視場面についても同様に図3に示すように、「加担・同調行動」については、非教育系課程では女性に比べ男性の方が有意に高かったが、教育系課程では、どの行動についても有意な男女差は見られなかった。

3）共感性といじめ関連行動との関連

①共感性といじめ関連行動の各因子との相関

今回の研究ではSpearmanの順位相関係数の絶対値が0.3以上のものを重要な関連があると考えた。共感性といじめ関連行動の各因子との相関係数を求めたところ、表2に示すように暴力場面における「加担・同調行動」と「他者感情への敏感性」「ネガティブな感情の同情」「ポジティブな感情への好感」に有意な負の相関が見られた。また、無視場面における「加担・同調行動」と「ネガティブな感情の同情」にも有意な負の相関が見られた。

②ロジスティック回帰分析

共感性といじめ関連行動の各因子との関連を調べるため、いじめ関連行動の各因子を従属変数として二項ロジスティック回帰分析を行った。各因子の項目数が違うので、4または5項目の場合は2項目以上で5点、2または3項目の場合は1項目以上で5点の回答をした人を該当する行動をとる、と考えた。また、従属変数および独立変数に用いた項目の回答をまとめる際は、各関連行動をとる回答を1、それ以外の回答を0の二値に分類し解析した。

男女をまとめて分析した結果は表3に示すとおりで、2つ場面の「被害者援助行動」について有意に関連する共感性の下位尺度が選択された。暴力場面における「被害者援助行動」にはついては「ネガティブな感情への同情」（odds ratio = 1.237, p=0.007）が、無視場面における「被害者援助行動」にはついては「ポジティブな感情の共有」（odds ratio = 1.237, p=0.011）と「ネガティブな感情への同情」（odds ratio = 1.237, p=0.002）が有意に関連していた。

男性についてみると表4に示すように、暴力場面の「被害者援助行動」について有意に関連する共感性の下位尺度が選択され、「ネガティブな感情の共有」が「被害者援助行動」に有意に関与していた（odds ratio = 0.699, p=0.036）。Odds ratioが1未満であることは「ネガティブな感情の共有」が強い方が、「被害者援助行動」を促進させにくく、「ネガティブな感情の共有」が弱い方が、「被害者援助行動」を促進させやすいことを意味する。無視場面におけるいじめ関連行動については、どの因子についても有意に関連する共感性の下位尺度項目は選択されなかった。

女性についてみると表5に示すように、2つ場面における「被害者援助行動」に有意に関連する共感性の下位尺度が選択された。暴力場面における「被害者援助行動」にはついては「ネガティブな感情への同情」（odds ratio = 1.286, p=0.014）が、無視場面における「被害者援助行動」にはついても「ネガティブな感情への同情」（odds ratio = 1.329, p=0.008）が有意に関連していた。どちらの場面でも、「ネガティブな感情への同情」は「被害者援助行動」を促進させやすいと考えられる。

また、無視によるいじめより暴力によるいじめの方が“より危険で、一人であるいは誰かと一緒すぐにいじめを止めなければ”という認識を持ちやすくまた、緊急性も高いと考えられるので、暴力場面については、仲裁行動についての項目を抽出して新たな因子とし検討した。つまり、「誰かと仲裁する」「Bたちに誰かとやめるように言う」「1人で仲裁する」「Bたちに1人でやめるように言う」という4つの項目を構成要素とする因子「仲裁行動」を作成し、二項ロジスティック回帰分析を行った。

その結果は表6に示すように、男性の場合では、「視点取得」が「仲裁行動」（odds ratio = 1.929, p=0.025）に有意に関与していたが、女性の場合では、「ネガティブな感情の共有」が「仲裁行動」（odds ratio = 1.221, p=0.059）に有意に関与していた。

Ⅴ．考察

本研究では、いじめの傍観者に着目して、対象者に傍観者を役割取得させて、その後のいじめ関連行動と自身の共感性との関連を検討した。その結果、共感性においては、女性の得点が男性よりも高いという葉山ら（2008）の先行研究と同じ結果が得られた。つまり、女性の方が男性より共感性が高いという結果はかなり普遍的なものであると考えられる。

いじめ関連行動では、非教育系課程では暴力場面と無視場面を問わず、男性は女性より「加担・同調行動」を有意にとりやすかった。教育系課程においては、有意水準には達しなかったものの、男性は女性より「加担・同調行動」をとりやすい傾向が見られた。これらのことから、男性の方が女性より加担・同調行動をとりやすいのは、かなり普遍性が高いと考えられる。また、暴力場面では、非教育系課程より教育系課程の男性の方が、有意水準には達しなかったものの、「被害者援助行動」の得点が僅かに高かったことから、教育系課程の男子学生は被害者援助行動をとりやすいと考えられた。このことは、教育系課程はいじめの教育を受ける機会が多く、いじめの基本的理解といじめに対するより正しい認識を持っているため、あるいは将来教員になりいじめ問題と向き合うことを自覚しているためかもしれない。

今回用いた共感性は認知的側面と感情的側面で構成されている。感情的側面には、「ポジティブ

な感情の共有」「ネガティブな感情の共有」「ネガティブな感情への同情」「ポジティブな感情への好感」が含まれる。今回の結果より、共感性の感情的側面はいじめ関連行動とかなり関連していた。特に、「ネガティブな感情への同情」（他者のネガティブな感情に対する他者志向的反応を持つ傾向）は「被害者援助行動」に強い促進的影響を持ち、また「加担・同調行動」に対しては抑制的な影響を持つと考えられる。傍観者は人間関係や人とのかかわりに 無関心で自分の関心をもつものにしか気が向かない傾向にある。また、いじめに対してやめてほしいと思っていても、何もできず、無力感を抱えている場合もある。本研究の結果から、共感性の中でも特に「ネガティブな感情への同情」を高めるような教育や介入は、いじめ場面における傍観者を援助者に変える効果や、いじめ行動に同調する加害者へ変えない効果が期待できる。また、暴力場面における仲裁行動には男性では「視点取得」、女性では「ネガティブな感情の共有」が大きく寄与していた。「視点取得」は実際に相手の立場に立って認識し理解するという傾向を示す尺度である。つまり、実際に仲裁行動を起こさせるためには、男性においては共感性の感情的側面だけでなく認知的側面が重要であり、視点取得を向上させるような教育や介入も重要と考えられる。

これまで、共感性を高める取り組みおよびプログラムの開発について、いくつかの報告がなされている。例えば、Nosek, Gifford,＆Kober（2014）は、看護学生を対象に、非暴力コミュニケーションの訓練を行った結果、学生の共感性が高まったことを報告している。西村・村上ら（2015）により開発された「共感性を高める教育的介入プログラム」も、共感性を高めることに効果があったと報告されている。今後、いじめの抑制につながる、より効果的な共感性教育についての研究が、さらに進展することを期待している。

謝辞

本研究は、第一筆者が研究を行い、第二筆者が指導した平成28年度愛知教育大学教育学研究科養護教育専攻の修士論文を、加筆・修正したものです。本研究の計画策定に貴重なご助言・ご指導をいただきました名古屋大学・心の発達支援研究実践センターの五十嵐哲也先生に、この場をお借りして深く謝意を表します。また、本調査にご協力いただきました学生の皆さんにも心より感謝申し上げます。

Ⅵ. 引用文献

1）塩谷治彦（1997）　現代的いじめについての社会心理学的考察．現代社会学研究, 第10号: 132-149.

2）平野美沙子（2015）　いじめを考える心理学－いじめの深刻化を防ぐために－．環境と経営, 第21巻, 第1号：9-16.

3）森田洋司・清永賢二（1986）　いじめ, 金子書房.

4）森田洋司・清永賢二（1994）　新訂版　いじめ　教室の病い, 金子書房

5）森田洋司（1990）家族における私事化現象と傍観者心理. 現代のエスプリ, 271: 110-118.

6）森田洋司（2001）　いじめの国際比較研究・日本・イギリス・オランダ・ノルウェーの調査分析, 金子書房

7）白木優馬（2013）いじめ場面における傍観者の援助行動を生起させるには ―計画的行動理論および傍観者の自己認知からの検討―. 教育心理学フォーラム・レポート, FR-2013-02.

8）塚本琢也・田名場忍（2007）　いじめ場面における第三者の傍観、仲裁行動の発生、抑制要因の探索的研究. 弘前大学大学院教育学研究科心理臨床相談室紀要, 4: 19-29.

9）正高信男（1998）　いじめを許す心理, 岩波書店

10）登張真稲（2005）　共感喚起過程と感情的結果、特性共感の関係―性の類似度、心理的重なりの効果パーソナリティ研究, 13: 143-155.

11）桜井茂男・葉山大地ほか（2011）　他者のポジティブ感情への共感的感情反応と向社会行動、攻撃行動との関係. 心理学研究, 82: 123-131.

12）Crowne, D. P., Marlowe, D.（1960）: A new scale of social desirability independent of psychopathology. *Journal of Consulting Psychology*, 24: 349-354.

13）北村俊則・鈴木忠治（1986）　日本語版Social Desirability Scaleについて. 社会精神医学, 第9巻: 2号.

14）葉山大地・植村みゆきほか（2008）　共感性プロセス尺度作成の試み. 筑波大学心理学研究, 36: 39-48.

15）蔵永瞳・片山香ほか（2008）　いじめ場面における傍観者の役割取得と共感が自身のいじめ関連行動に及ぼす影響. 広島大学心理学研究, 8: 41-51.

16）水野正幸（2012） いじめ場面における目撃者の役割取得と共感がその後のいじめ関連行動に及ぼす影響. 創価大学大学院紀要, 34: 293-318.
17）Nosek, M., Gifford,E., Kober, B.（2014）: Non-violent Communication（ NVC）training increases empathy in baccalaureate nursing student :A mixed method study. *Journal of Nursing Education and Practice*, 4: 1-15.
18）西村多久磨・村上達也ほか（2015） 共感性を高める教育的介入プログラム ―介護福祉系 の専門学校生を対象とした効果検証―. 教育心理学研究, 63: 453-466.